パリの鼓動を自転車で知る

加藤　一

Cycling Brings You the Heartbeat of Paris

Hajime KATO

杉田　自転車とのお付合いは何歳ぐらいから？

加藤　小学生のころからです。始めから大人の自転車で三角のフレームに短い足をつっこんで、反対側のペダルを踏む。三角乗りというヤツですね。車体が斜めになり、大人から見れば危っかしい乗り方ですが、それで東京・神田のあたりを走りまわっていました。

杉田　三角乗り！　私もやりました。小さな体で大きな自転車を三角乗りで動かすのは、ちょっと得意な気分でした。

加藤　そうそう。子供用の補助輪つき自転車に乗っているヤツを見下すような感じで(笑)。

杉田　絵と自転車を人生の二本の柱にして、それぞれの分野で輝かしい業績をお持ちですが、子供の頃大きな影響を受けたのはフランス人とか？

加藤　ええ、中学生の仲良しの友人ロジェ・滋野のお母さんがフランス人。女流画家としてパリで認められていた人で、シクロツーリスト(サイクリング愛好者)でレースマニアでもあったので、絵と自転車について大変な教えを受けました。

杉田　そもそもフランスが自転車の発祥地とか。

加藤　そうです。だからフランスの自転車熱は大変なのですね。フィガロ紙のアンケートでは、週末に自転車を楽しむ人が全国で53%、大都会パリでも10%だそうです。もちろん、都会より田舎の方が〝風の音〟がいい。

1925年東京・神田生まれ。子供の頃から絵と自転車に強い情熱を持ち、現在はパリで抽象画家として活躍中。日本における自転車競技の第一人者で、1983年日本人初のフランス国際自転車競技功労賞ギドン・ドール賞受賞。国際プロ自転車競技連盟副会長。

杉田　ご自宅からアトリエまで自転車で通われるそうですが、パリの街を走るのは恐ろしくありませんか。自動車が多いでしょうし。

加藤　フランスは自転車で走って最も恐ろしくないところです。自動車に乗っている人が「自転車と事故をおこしたら高くつく」と恐れをなし、自転車に注意していることもあるのでしょう。フランス人はケチですからねえ、そんなことでお金を使いたくないんですよ。怖いのはオランダ。自転車があまり多過ぎて、勝手気儘に走りますから。

杉田　では私がパリで自転車に乗っても大丈夫？

加藤　ええ、大丈夫。道路の右側を走ってさえいれば怖いことなどない。パリの生活を始めた33年前ですが、知人がオレンジ色のロードレーサーをプレゼントしてくれましてね。その競技用の自転車でパリ中を駆け回ったのですが、石畳の路面から体に伝わるヴィヴラシオン（振動）を通じてパリの街を知ったようなものです。自転車で切っていくパリの空気が、歩いている時とまるで違ったように頬に軽いんですねえ。

杉田　なるほど。私の今迄のパリはハイヒールのかかとから伝わってきたものですが。

加藤　ヨーロッパでは、自転車に乗るのは心臓病のリハビリに最高の効果があるとされていましてね。たしかに、自転車に乗っている振動と路面から伝わるヴィヴラシオンが人間の筋肉に与える影響は大き

インタビュアー
杉田　房子
本紙編集委員。旅行作家としてほぼ世界をまわる。専門は海外紀行文、国際生活文化比較論。最近は日本ナショナル・トラストの理事として、自然・歴史遺産に関心を持つ。

い。ですから、室内で自転車をこぐのはダメ。振動の中で筋肉を動かす、ヴィヴラシオンが大切なのです。友人のカナダのトロント大学教授ポール・ビサックは〝サーカス教授〟と呼ばれるほどサーカスを研究している大変面白い人ですが、彼によれば「自転車は、人間の乗物の中でただ一つ人間の〝外部骨格〟として存在する」。人車一体で、乗っている時は堅い手であり足であるというわけです。

杉田　ところで、日本の自転車の質は如何ですか。

加藤　今や世界のトップクラスです。名人もいますよ。乗る人に合わせた手造り自転車の名人もいます。戦後の何もない頃、乗る自転車も自分で鉄を叩いてハンドルを作ったり、苦心して造り出した時代がありました。そのころ業界の人たちとフランスの自転車部品の3大メーカーの工場を見学に行った時、「コピーされるから日本人には見せない」といわれ、悔し泣きしながら「10年たったら絶対にいいものを作ってみせる」と言い合ったものです。彼等はやりました。いまや日本の部品は世界を席捲したといっても過言ではありません。

杉田　日本では自転車が通勤・通学の足になっているため、駅前の放置自転車が問題になっていますが、こんな風景はパリにもありますか。

加藤　ありません。パリ郊外にいけばどうか知りませんが……。駅前にもし置いといたらいい自転車はすぐ盗られてしまいますよ。鎖をつけておいても、車体と鎖だけ残っていて、他は外して持っていかれてしまう。だいたい、朝に駐輪して夕方には持ち帰るならともかく、放置は罰則ものです。その罰則も知らぬ振りというのなら片付けるほかない。売るなり捨てるなり、この2つしか方法はありませんね。

杉田　自転車人口が日本でもこう増えると、車に乗っていても、歩いていてもヒヤリとすることが多いのですが、マナーが悪いと思いませんか。

加藤　そう悪いとも思いませんが……。しかし「マウンテン・サイクリングに乗りたいのです、どこで免許とれるのですか」とか、ひどいのになると「自転車教習所は？」「講習受けるのはどこで？」などと質問する女性があきれるほど多い。水泳にしろエアロビクスにしろ、講習を受けますね。あれと同じだと思い込んでいるんですね。習いごとが好きなのですよ。ですから、この自転車はこう乗るのだ、という楽しい講習会を国際交通安全学会が主催なさったらどうですか(笑)。健康、美容、加えて交通のマナー、すべてにプラス！

杉田　一石三鳥！

加藤　フランスには「ツール・ド・フランス」という国内を一周する世界最大のロードレースがあり、大変な人気です。一般道路を使うので10年前パリ市警は3年かかって警視庁とやりあい、やっと道路使用の許可がおりました。なにしろ前の晩から車の通行を止めるのですからねえ。

杉田　日本での道路使用はもっとキツいでしょう？

加藤　キツいですよ。昨年日本で初めての本格的な自転車競技大会「世界選手権大会」が開催されました。会場のグリーンドーム前橋は、日本が世界に誇る本格的自転車競技場です。

杉田　立派な競技場ですね。

加藤　自転車といえば〝競輪〟というイメージの時代は去っているんですから――。

杉田　ありがとうございました。みどりの風を切って自転車で走りたくなりました。

インタビュー後記

（私がモデルを委ねられたのは、ビッ（ゆり子）

（施）（一そ人まとやたッ七自る出の今献た）
（1本のでさし絵〝ク種転ー来た年しあ）
（9の掌あにて筆自の目車のるめ度たらビが）
（9線はる諺高を転第に競諺人来の方ゆリ委）
（1が真。をいと車一優技のは日受にるテ員）
（年目中煙実評れ人候勝に通な。賞贈文ィ長）
（5立に草証価ば間補、出りん┐者ら化にの）
（月っスをしを抽〝でオ場、で一。れに結K）
（13たッ指て受象がもリ、国もつ贈る深びO）
（日。キにいけ画、あン通体出事呈賞くつIII）
（実　リ、るる家片っピ算の来の式）貢い賞）